

はじめに

江戸時代の桑名は東海道の宿場町・港町・城下町で栄えた処である。なかでも東海道の宿場であったので、東西からの人が絶えず行き交い、また物や情報も多く集ってきた。それらを活用した町衆は財力を蓄積し、文化も栄えた。私は11歳の昭和22(1947)年から桑名に住みつき、桑名の歴史を調べてきた。

なかでも交通史に関心をもってきた。天皇・皇后、徳川将軍、諸大名を始め、商人、伊勢参りの庶民などが桑名を通っていった。そしてオランダ使節と琉球使節が通ったのは異色である。オランダ使節が桑名を通ったことは、江戸時代中期の『久波奈名所図絵』(添付)に描かれているし、オランダ使節の参府記録にも記されている。



『久波奈名所図絵』から

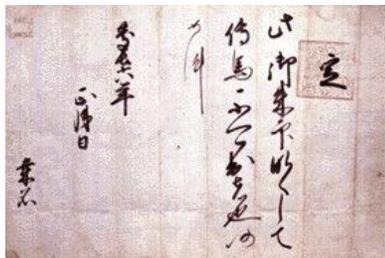
しかし琉球使節が桑名を通った史料は桑名では残っていないようである。但し桑名以外の史料に出てくるので、私も関心があったが、深く調べることもなかった。平成29(2017)年に『未刊 松平定信史料』(ゆまに書房刊)が刊行された。松平定信は桑名に関係する人物なので、桑名市立中央図書館で閲覧してみたが、定信が老中時代の幕府の記録であって、桑名に直接関係する部分は見当たらない。ただ「琉球人来朝一件」が目についたので、その部分だけコピーした。

そのコピーを放置したままであったが、最近になって読んでみて、琉球使節の事を調べる気になった。そして桑名高校同窓会 HP に「尾野山隋風」22号

(2019.09.01)に「渡船の遭難」、同23号(2019.10.01)に「琉球使節の江戸上り」、同24号(2019.11.01)に「琉球使節と朝鮮通信使」、同25号(2019.12.01)に「オランダ人の通行」を書いた。それらに加筆訂正した形で今回の**琉球使節の江戸上り**を書いてみた。もとより琉球使節全体を調べるだけの知力も体力もないので、前記の「琉球人来朝一件」や東海地区での行程を中心に調べてみることにした。

東海道桑名宿の開始

慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、江戸と京都を結ぶ通信制度を整備し、慶長6年正月に「伝馬朱印状」を出した。これが江戸時代の東海道宿駅制度の始まりであり、桑名宿が開始された。この時の桑名宿に出された「伝馬朱印状」(写真)が現存している。



桑名宿に出された伝馬朱印状(物流博物館所蔵)

付属文書として「御伝馬之定」(定書)が添付されていて、桑名宿の場合は「上は四日市 下は宮 船路のこと」と書かれており、桑名から宮(熱田)へ船で渡ることが明記されている。即ち「七里の渡し」はこの時から公的に定められた。

余談であるが『新修名古屋市史』第3巻(1999年刊)には「元和二年(1616)に熱田から桑名へ海上七里の海路が開設されて」とある。あちこちで調べてみると、名古屋では元和2年に尾張藩の初代徳川義直が着任して、藩の熱田奉行所がおかれたので、その時を「七里の渡し」の開始と誤解しているようである。熱田は古代からの歴史があり、尾張藩は江戸時代初期からの歴史しかないのに、熱田を軽視していると思われる。